

中流からのメッセーヂ

荒川の中流部は〈都市維持装置〉

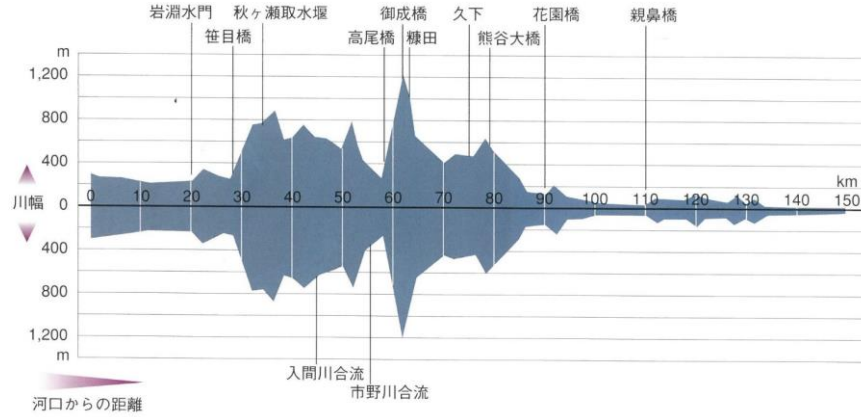
河川は普通、下流に行くほど川幅が広がる。ところが荒川は中流部が広い。河口から六二雫地点の左岸・鴻巣市と右岸・吉見町の間にかかる「御成橋」の堤防間の長さは二・五四雫。荒川本流の末流の幅は五〇〇〜六〇〇雫。中流部が下流部の四倍もあるなんて川はそうそうない。

荒川中流部の広い高水敷(堤外で洪水時に水に浸かる所)は今なお民有地で、そこに民家も工場もあり、御成橋にはバス停もあり、その地に立つと静かでのどかな世界が広がり、そこが堤外とは気づかない。しかし荒川が洪水ともなれば、左頁下の写真のように、堤外は広大な遊水池になる。

その下流の「秋ヶ瀬取水堰」は、東京と埼玉に水道用水や隅田川浄化用水、工業用水を送り出す荒川最終の取水堰。ゲート操作で影響を受けるバックウオータは桶川市と川島町の間にかかる太郎右衛門橋(市野川の合流点より少し下流)辺りまで及び、荒川中流部は東京と埼玉の水道貯水池でもある。

荒川は東京・埼玉を支える〈都市維持装置〉にもなって貢献する、けなげな川だ。

■荒川の川幅変化図



■御成橋地点の荒川堤外地

平成 11 年 8 月洪水時の荒川「御成橋」地点



河口から 62 km 地点の荒川。
右側に大きく弧を描くラインが荒川低水路。
その外側に堤防。
中央を蛇行する筋は荒川旧流路。その右側が
鴻巣市、左側が吉見町。中央を横断するライン
が御成橋。旧流路と御成橋が交差する辺りに
集落。

どうして荒川がこんないびつな川になったのかというと、ひとえに荒川の最下流部に江戸幕府が開かれ、明治以降もそこが日本の首都として引き継がれたからだ。

それは天正十八年(一五九〇)八朔の吉日に家康が江戸入りしたことに始まる。武蔵野台地の古くて固い下末吉面東端に江戸城を築き、そこから開析谷を利用して「の」の字に濠を巡らせ、隅田川につなぎ、江戸の町の拡大を図った。同時に江戸後背地の「武蔵東部低地総合開発」の基盤整備を進めた。

隅田川も江戸最初期の大規模海岸整備の一環で、利根川の末流・隅田川(現横十間川辺り)を入間川と合流していた利根川派川・宮戸川筋に付け替え、そこを隅田川にして(現隅田川)、整備したものだ。

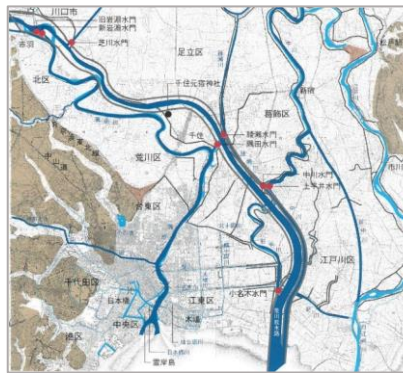
武蔵東部を縦貫していた利根川は、「利根川東遷」事業で利根川洪水を常陸川筋から銚子へ送りだす放水路(現利根川)を整備し、普段の水は「葛西用水路」を通じて江戸周囲の村々に送った。

荒川は、寛永六年(一六二九)の「荒川西遷」事業で本流(現元荒川)を久下で締め切り、熊谷扇状地の一流路だった和田吉野川に瀬替えて、市野川、入間川、隅田川とつなぎ、川越から新倉までの荒川右岸側の内川も舟運路(新河岸川)に整備して、正保四年(一六四七)開業の「川越舟運」に備えた。

しかしこの荒川西遷は、江戸港に届く上方から「下りもの」、新河岸川を通じて後背地から届く「下らないもの」の一大集積地・隅田川に洪水をもたらす。そこで元和六年(一六二〇)、現隅田堤の対岸に、全国の大名を集めてV字形に配置した「日本堤」を築造し、隅田川への洪水流入を制限した。

一方、日本堤より上流側の左岸側は、隅田堤―熊谷堤―三領堤―土屋古堤から大宮台地西端について洪水防壁。右岸側は日本堤から川越までは武蔵野台地東端が続く。そこから上流は「川島領大囲堤」「吉見大囲堤」を築いて堤内を守り、広い堤外は荒川洪水を調節する遊水地にした。江戸時代に荒川洪水が日本堤を超えて江戸を襲ったのは、天明六年(一七八六)の一回のみだったという。

日本堤から熊谷まで続いた幅広荒川は、近代以降、都内では荒川低地に工場や大規模団地が進出し、笹目橋より下流は五〇〇〜六〇〇メートルに狭められた。上流の埼玉側は、大正七年(一九一八)に計画、同九年着工の「荒川上流改修」で、「荒川本川は中流部の遊水地に頼る」とされ、今に引き継がれた。



上図：明治13年、14年迅速測図に見る荒川・江戸川流域。

下図：大正13年荒川放水路通水後の荒川下流部。当時は左の隅田川が荒川。昭和9年、放水路が正式な荒川になる。

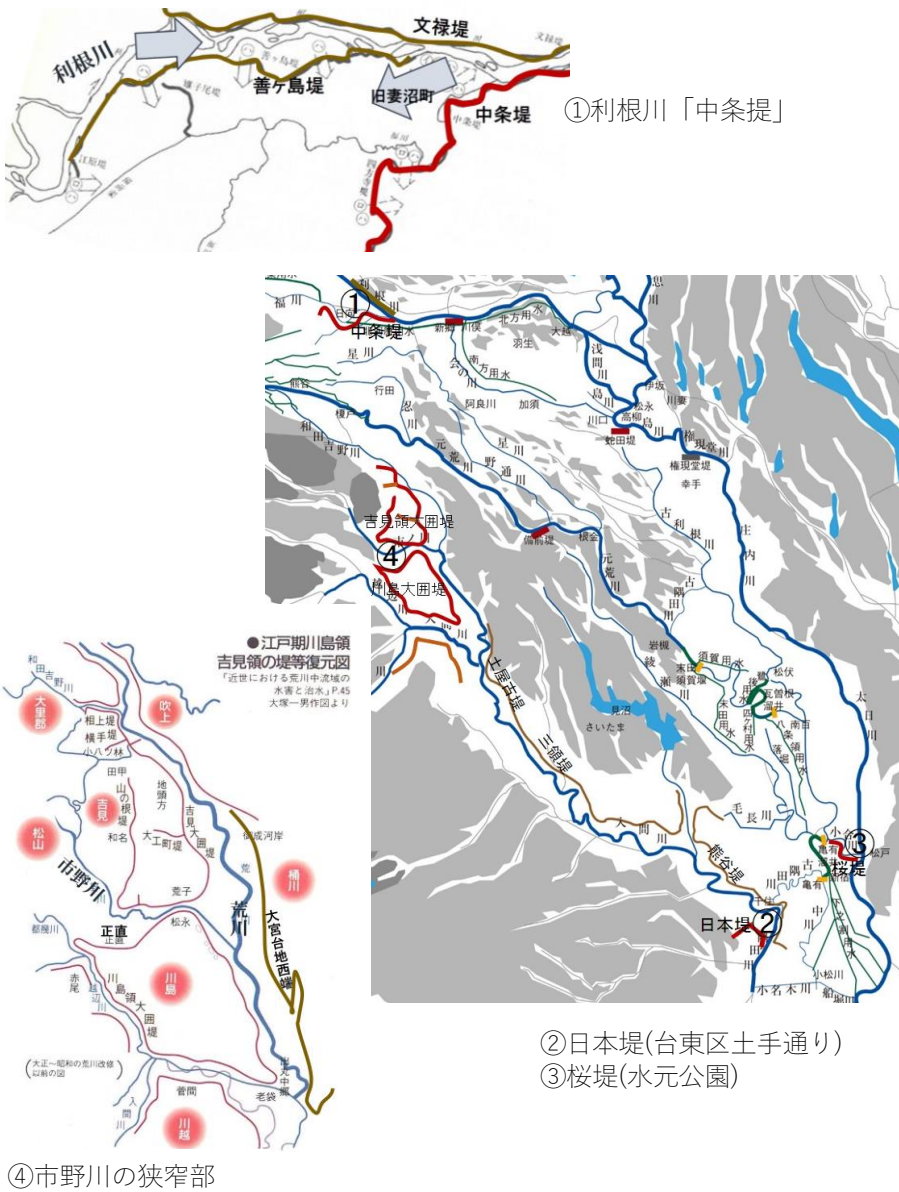
埼玉は江戸・東京のバッファゾーン

荒川流路は甲武信岳直下の荒川起点から東京湾の河口まで一七三㍎。そのうち一〇〇㍎強は平野を流れる。全流路に対する平野部の割合は日本の主要河川の中で最も長い。流域面積は約二九四〇平方㍎。そのうち山地は一四七五平方㍎。平地(丘陵・台地・低地)は一四六五平方㍎。日本の大河川の平均は山地七に対して平地が三。荒川は山地と平地の割合がほぼ同じ。荒川の河川勾配は、山地部は三〇分の一。平地部の平均は一四〇〇分の一。低地の河川氾濫原は五〇〇〇分の一。荒川は谷口にあたる寄居で平野に出ると、広く平らな低地で氾濫を繰り返していた。その末流に江戸・東京がある。

武蔵東部低地総合開発では、中流部の埼玉県内各地に遊水地機能をもたせた。この手法は伊奈流(関東流)と呼ばれ、家康の近習の一人であった初代伊奈忠次、次男忠治ら伊奈家代々の手で進められた。河川をルート状にする日本堤のような手法も伊奈流。荒川支流の市野川でも、利根川の「中条堤」や埼玉と東京の境の「桜堤」等でも見られる。荒川西遷後荒川支流になる人間川には、外秩父山地や丘陵地帯から都幾川や越辺川等いく筋もの河川が寄り集まって合流し合うが、それぞれ合流地点付近の堤は「霞堤」にして、洪水を堤内の田に流入させ本流を助けた。

このように江戸時代の治水は低地開発の一環で行われたもので、山からの沃土を農地に入れるための策でもあった。洪水を受け入れて耕作する「流作場」は市野川左岸の吉見領に多く見られた。

■埼玉各地の遊水地機能



近代土木技術と「関東流」と

明治になって、社会は工業化の道を歩むようになり、治水事業も科学・機械・電気等を駆使した近代土木技術に代わり、規模と能力を拡大し、成長する社会を支えた。荒川下流部では「荒川放水路」（現荒川）が開削され、新河岸川は荒川右岸に並行して一一遶水路を開削延長し、隅田川につなぎ、放水路を荒川本流にし、都内中央を流下する隅田川を水門で切り離れた。利根川も連続堤防の延長・強化で、東京に押し寄せる利根川洪水から首都を守った。

その中で荒川中流部では、荒川と入間川の合流地点を下げる四遶に及ぶ「背割り提」、幅広堤外には二五カ所（計画では二七カ所）の「横提」など、地形を考慮した関東流を引き継ぐ工法も引き継がれた。しかしそれでもカスリーン台風では、埼玉から都内に至る低地が、地形図が示す低地の色分けそのままに浸水した。カスリーン台風を機にダムによる洪水調節が導入され、奥利根や奥秩父のダム群の完成に伴い順次効果を発揮し、最後に託された「八ッ場ダム」も長い時間を要したが、令和元年に関東を襲撃した台風十九号にぎりぎり間に合い、利根川・荒川本流筋の越水や破堤は免れた。

代わって、本流筋に負荷をかけないようにするためか、中流部の遊水地機能を果たしてきた田が大きく減少したためか、はたまた最近の異常気象によるためか、さまざま理由が考えられるが、結果、本流に排水できない支流のバックウォータによる浸水被害が埼玉各地で多発するようになった。

みんなで地域保全・流域保全

そのような状況の中で当NPOは、残された田を残し、荒川支流・芝川沿いの浸水被害を減らし、ひいては荒川本流に負荷をかけないようにしよう、また田に水を入れ美しい田を残せば、宅地等への転用を多少とも遅らせ、流域の遊水地機能の減少を抑制できるのではないかと思ひ、首都圏三〇遶、さいたま市中央に位置し、江戸中期以来の通称「見沼田んぼ」の見山地区で、特定農地貸付法に基づく「市民田んぼ」を開設した。

以来二十余年、遊休農地や耕作放棄地の維持管理を続け、現在、田の面積は一・五町歩(5a)。田に接する斜面・平地林も里山に再生し、その管理面積は一・三畝。見沼田んぼ一二〇〇畝のごく一部だが、台風シーズには毎年のように遊水地機能を発揮している。

特に、前述の令和元年の台風十九号では、ひと月にわたり滞水した。水深一〇センチ、二〇センチの水がいつまでも引かず、稲刈りでは大いに苦労したが、稲穂は何事もなかったかのように田を渡る風に揺れ、我々は生産者ではないので被害額も出ない。翌年には前年の苦労は忘れていた。

流域の「健やかな水ネットワーク保全」に貢献しようとするこの市民活動は土地の循環型伝統農法を継いで無肥料・無農薬のため、人手もいるし、大型農機、特に稲作ならではのコンバインや耒摺り機等は周囲農家の所有もなく、毎年稲刈りの度に苦労するが、自然との触れ合いも楽しいし、何より



2023.6.4 みんなで田植え



2023.7.29 田植え後すぐから花が咲くまで続く田の草取り。



2022.10.15 ハサカケが壮観。毎年、台風を案じながら続けている。

R5 年度市民田んぼ作業より

春4月の用水路浚いに始まり、耕耘、畦づくり、田植え、田の草取り、稲刈り、ハサカケ(天日干し)、脱穀、粃摺り。農閑期も里山(斜面・平地林)の下刈りをして「堆肥」をつくり、翌年のハサカケ用の竹伐りをして、また春を迎える。これを繰り返しているうちに23年経ってしまった。



2023.4.23 用水浚い。毎年春、これをしないと利根川の水が来ない



2023.5.13. 畦に糸を張り、畦を切り、水が入れば畦塗り。毎年この繰り返しで生き物が育つ。



2023.7.23 用水路草刈り。毎年夏、草を刈って流水確保。

地域、流域に多少とも貢献しているという誇りがある。

ここへきて、当市民田んぼが「流域治水」のモデルとして評価されるようになった。市民活動が多々ある中で、地域、流域を視野に入れた活動は少ないかもしれない。しかし「流域は一つ」、ダム・堤防・放水路・洪水調節池・排水ポンプ等の整備、市町村を巻き込んだ「校庭貯留」、そして我々のような田の保全、流域が一体になって流域を流れる水を見つめ、協力し合う社会になることを願っている。